

芦安ファンクラブ通信

「南アルプス芦安山岳館」開館の御挨拶

芦安村長 清水哲夫

周りの山々の雪解けも進み、長かった冬からようやく山間の山村にも春の足音がやってきました。本日ここに南アルプス芦安山岳館の竣工を迎えることが出来ました。この施設は、村民誰もが待ち望んでおり、林野庁の補助事業であります木材産業経営革新公共施設等事業を導入し建設致しました



完成した「南アルプス芦安山岳館」南面

第12号 山岳館 特集号

NPO法人
芦安ファンクラブ
中巨摩郡芦安村
芦倉 1589-8
事務局：(大滝)
055-288-2531

県産材の需要拡大を図ることを目的としているため、集成材をふんだんに使っているため、集材材を中心とする南アルプスの山並みをイメージしており、山岳図書・語り部コーナー、南アルプスの歴史・文化・自然・本村の生活史などの展示室・インターネット事業による北岳及び夜叉神峠からのリアルタイムの映像、さらに気象など登山に必要な情報を提供する情報スペース・特別展示などが行えるラウンジなどにより構成されております。

本村は、南アルプス国立公園の玄関口であり3,000メートル級の山岳を擁する登山のメッカとして、これまで多くの人を迎えて参りました。今後、新たな近未来的な見地と理想を掲げながら新しいコンセプトによって自然と人が融合できる新しい文化と観光の拠点づくりが必要であると考えます。

明治8年、本村が誕生して以来、実に128年の歳月が経過しその間、先人達は山と水と戦いの歴史の中で多くの苦難を乗り越えその基礎を築いて参りました。本年4月より新たに「南アルプス市」として出発することになりますが必ずや新しい観光資源としての可能性を見いだせる機能と内容を兼ね備え、地域住民の生き甲斐を確保出来るもの確信しております。

結びに
なりまし
たが、本
までの間
財源措置
等諸般に
わたりご
指導を賜
りました
関係機
関及び村
議会、設
計・監理
及び建設
に携わ
つてくだ
さいまし
た関係者
業者各位
又、貴重な
提
言を頂き
ました建
築委員の
皆様、更
は展示に
あたり情
報の提供、
貴重な山
岳図書等
を寄贈し
て下さい
ました南
アルプス
を愛する
全国の
アルピニ
ストの
皆様に
深甚なる
敬意と感
謝を申し
上げ
竣工の
あいさつ
と致します。



完成した「南アルプス芦安山岳館」の資料展示室俯瞰図

南アルプス芦安山岳館開館に寄せて

NPPO 芦安ファンクラブ会長 花岡利幸

一 はじめに

南アルプス芦安山岳館は、関係者の努力が実り、今年の三月、予定通りの開館を迎えることができました。この山岳館の建設予算がたったのは二〇〇一年の暮れですが、それから一年余で開館に漕ぎ着けたことになりました。

この間の関係者の努力は並大抵のものではありませんでしたが、官民協力による新しいやり方で行った、この作業プロセスによって培った自信は、これからの南アルプス芦安の地域づくりに大きな力になることでしょう。本稿ではそのことを踏まえて、その舞台裏で芦安ファンクラブがお役に立ったことを、山岳館と芦安ファンクラブの関係を記述して、述べておきたいと思えます。

二 南アルプス芦安山岳館建設の動機

芦安ファンクラブはその設立の当初から、芦安村の将来について検討し、活動してきました。そのため、村を奥山の山岳地域と麓の村民居住地域に分けて検討しました。山岳地域では山小屋のあり方が環境保全との関わりの中で検討され、居住地域では登山教室のあり方が村づくりとの関わりの中で検討されました。一九九九年夏、その結果は芦安村将来計画(中間報告)となつて、清水哲夫村長に提出されました。

その後、芦安村を含む関係町村において合併の検討が進む中で、その結論は二〇〇三年四月一日、南アルプス市として誕生するのですが、その最後の方向性を決める時期を迎えていた二〇〇一年夏、私たちは合併を前提にしたときの南アルプスと芦安の重要性を再度、清水村長に提言しました。そして、村長の努力によりその年の暮れに、「事業名(山岳資料館建設)の予算化が実現されました。

三 南アルプス芦安山岳館建設

二〇〇二年一月七日に第一回 芦安山岳資料館建設委員会が招集されました。委員会は芦安を代表する村長、議員、行政職員、及び芦安ファンクラブを中心とする専門家のメンバーから構成されました。数回に亘る委員会での精力的な検討の結果、二月末には基本計画書と実施設計段階に移す段取りの検討結果が村長に手渡されました。基本計画の内容を建築に活かしてもらうために、デザイン設計コソペを

一般公募型プロポーザルで予定しましたが、時間の都合で指名公募型プロポーザルで行わざるを得なくなり、指名された設計業者との意見のやり取りは委員会が負うことになりました。

四月初めに、設計業者が決まり基本設計を彼らと一緒に検討し始めました。時間がないうちに、実施設計も同時進行で進めなければならぬような状況の中で、激しいやり取りもありましたが、七月末には基本設計ができあがり、実施設計、施工と建設は具体化していきましました。八月には施工業者も決まり、突貫工事の結果、二〇〇三年二月末には完成に漕ぎ着けました。

四 南アルプス芦安山岳館開館 準備委員会

建設の基本計画に盛り込まれた内容は、建物の割り振られた間取り、具体的に何を展示するかによって発揮されます。これを二〇〇三年三月の開館時までには整備しなくてはなりません。

南アルプスと芦安に関する資料を集めてうまく展示しなければなりません。これも最終的には別の専門業者に頼むのですが、展示の意図、計画から資料収集まで、すべて建設の基本計画と一直線に繋がっていますから、専門業者一人ではできません。そこで、建設の基本計画を練ってきた先の建設委員会のメンバーを中心にした拡大委員

で構成される開館準備委員会が八月に設立されました。



歴史を語り継がれる「語り部コーナー」

資料収集は村民から成る委員の皆さんにお願いしました。展示の基本計画は「山に学ぶ」、「山に登る」、「山に生きる」、「山の喜び」の四項目を立て、これに収集した自然に関する資料、人の関わりに関する資料を割り振っていきました。資料収集と整理が十月を過ぎてから本格的になっていきました。十一月には開館準備室が設立され、開館後もそのスタッフが運営事務に携わる体制が整ってきました。今年に入つて二月、展示作業の全貌が見えてきて、具体的な展示作業は専門業者に委託され、実施計画の最終段階に進みました。

五 おわりに

以上が、この一年余の間に行われた南アルプス芦安山岳館建設、開館までのあらまです。その間に、初めは「山岳資料館」として出発した施設名がだんだん内容を伴うようになり、それにふさわしい「南アルプス芦安山岳館」という正式名称が委員会の中で誕生しました。

肝心なのは、この山岳館のこれからです。「南アルプス及び芦安を中心とした南アル

プス山麓地域における人々の活動の過去(歴史)を記述しつつ、現在、未来の人々の活動を実践し、研究する中核施設」になるために、その運営に関しNPPO芦安ファンクラブが協力しなければならぬことがたくさんあるように思えます。夢の実現に向けて一歩ずつ確実な歩みを続けたいと思えます。



情報を解かり易い画像で伝える「大型ディスプレイ」

初のオーストラリア修学旅行を終えて

芦安中学校教諭 井田正則

芦安村では初めてのオーストラリア修学旅行が二月二十六日(水)～三月三日(月)にかけて五泊六日で行われました。ここに修学旅行の内容を紹介したいと思えます。

小中学生から保護者など多くの方々に見送られる中、バスで芦安を出発しました。ほとんどの生徒が海外は始めてで、生徒はこころなしか緊張した様子。東京に出ただけでも浮かれ気分になっていて、先が思いやられました。夕方、成田空港に到着、手続きを済ませ夜行便でオーストラリアに向かいました。

飛行機では乗務員が外国人だったこともあり、既に海外にいるような雰囲気。音や揺れでほとんど眠れぬ状態のまま、朝日を浴びた飛行機はシドニー空港に到着し、芦安中学校修学旅行団は、いよいよオーストラリアの地に第一歩を踏み出しました。

現地の日本人ガイドさんに迎えられ、息つく間もなくシドニー観光へ。ブルーマウンテンはシドニー市街から西へ100キロメートルのところにある丘陵地帯で、世界一急勾配のトロッコヤスリースターズという奇岩が有名なところです。生徒は、事前にスリースターズの由来について学習していたこともあり、実物を見て感動したようでした。

オーストラリア初の食事では、とうもろこしの粉でできた料理が口に合わなかったものの、生徒はフォーク・ナイフの使い方が上手だと褒められました。その日は、オペラハウスをバックに記念撮影をして、買い物をした後、シドニータワーの展望回廊レストランでシドニーの景色を眺めながら食事をして二日目が終わりました。

三日目は、この修学旅行一番のメイン



交流した学校の生徒達とハイ、「ピース」この頃はまだ緊張気味です

である学校交流とホームステイ。歓迎会では、四百名ほどの現地校の生徒の前で、



コアラを抱っこしてご機嫌 コアラも気持ちよさそう

芦安中学校二年生八名+教師は日本語の「さくらさくら」、英語でオーストラリア民謡の「ウォルチング・マチルダ」などを披露しました。また、英語の授業でつ

くったビデオで芦安中を紹介し、現地校の生徒にも芦安の様子を理解してもらうことができました。また、芦安村の保育園児、小中学生、高齢者で作成した「芦安だいきカルタ」を持参し、現地校の生徒たちにカルタを教えた行ったカルタ大会は予想以上に盛り上がりました。こちらで準備したことのがうまきいき、生徒も教員も一安心できました。

のコミュニケーションは、片言の英語や身振り手振り、辞書を聞きながらやるのがやっとで、思うようには行かなかったものの、心を通じ合わせることはできたようです。楽しい情報交換をしあう生徒たちの様子から、ホームステイが満足のいくものであったことがうかがえました。



ホームステイ先の皆さん ありがとうございます

終わってみると、みんな満足気。買い物に行ったり、スポーツをしたり、シドニーオリンピックの会場に行きプールで泳いだりと各家庭ごとさまざまなことを経験させてもらったということでした。と

旅行前は「海外なんて行きたくない」「ホームステイが嫌だ」と言っていた生徒たちですが、旅行最終日の「帰りたい」「このままオーストラリアに残りたい」という言葉から、修学旅行が満足のいくものであったことを認識するとともに、この修学旅行が成功であったことを確認することができました。

この修学旅行で、国土の広さや食事の量など様々なことからオーストラリアのスケールの大きさを感ずることができました。そして、学校交流やホームステイを通して生きた英語に触れ、現地の人々と相互に理解し合うとともに、芦安中二年生の仲間同士も協力することができました。この修学旅行での多くの貴重な経験が、生徒の自信や活力になり、今後の生活に生きていくことでしょう。

今年度初めて行ったこのオーストラリア修学旅行が、芦安中学校の特色ある教育活動の一環としていつまでも続いていくことを願います。